

TOPICS 大阪工業大学の挑戦 Vol.6

川上村の豊かな自然に学び、
環境共生に取り組む技術者をめざす



村担当者の案内で取材する上級生

大阪工大と奈良県川上村は2010年7月に連携協定を結んだ縁で、同村の豊かな自然、地域資源を生かし、「環境共生」に取り組む人材育成を目指してさまざまな活動を展開しています。毎年春に新入生オリエンテーションを実施したり、旧川上東小学校をリノベーションするなどして連携を深めてきました。そうした中で新たに始まった2つの取り組みを紹介します。



金賞作品

若者の感性で川上村をPR
学生112人がウェブコンテンツ制作に挑む

若者の感性で川上村の観光資源をPRしようと、情報メディア学科の3年次生112人は、ウェブ上で同村を紹介するコンテンツを制作。栗山忠昭村長と地域振興課の職員が審査し、1月15日に枚方キャンパスを訪れ、優秀9作品を表彰しました。

これは、課題解決型の必修科目「情報メディア演習」の一環として、昨年9月から取り組んできたものです。制作にあたって、授業担当の神田准教授と4年次生数人が現地でも自然の写真を撮影したり、滝やせせらぎの音を収録。村の担当者からも授業の初回で公式PRや観光情報の説明を受けました。3年次生たちは実際には村を一度も訪れず、これら取材情報を手掛かりに、想像力や企画力、調査力を駆使し、約2週間で作品を仕上げました。

金賞を受賞した赤松雄馬君は、代々伝わる河童(かつば)伝説をモチーフにしたキャラクターが登場するゲームを通じて村の伝統文化や歴史を理解できる作品を制作。「子どもに興味を持ってもらうため、文字説明を極力減らし、動きのある表現を工夫した」と話します。銀賞の赤松克馬君は、都会の若者が心の安らぎを求めて訪れたいくなるよう導入部分にこだわり、森や川など自然の美しさを際立たせる写真表現に工夫を凝らしました。同じく銀賞の足立奈生さんはすべてのキャラクターを手描きのイラストで制作し、「小さな子どもでも発見する楽しみを味わえる作品に仕上がった」と話します。

表彰式で栗山村長は「川上村が発信したいことを見事に表現した素晴らしい作品ばかりで感激した。村に関心を持ってもらうことが、何よりの励みになる。これからも、環境など自然やゴミの問題と一緒に取り組んでほしい」と謝辞を述べました。優秀作品は今春から村のホームページで公開される予定です。



村長を囲む優秀作品受賞学生たち

“ガラスおこし”で村おこし
エコ・アートプロジェクトが進行中

不要になった空き瓶などの廃ガラスを美しくよみがえらせる「ガラスおこし」の技法で作った蓄光材入りのタイルを川上村の遊歩道に敷き詰め、訪れる客に夜の魅力を再発見してもらおうとするエコ・アートプロジェクトが進行中です。

プロジェクトに携わっているのは環境工学研究部の学生たち。この技法を発明したガラスアーティストの岡本寛・環境工学科客員教授の指導の下、廃瓶を細かく砕いたガラス粒と、日中に太陽光を蓄えて発光する蓄光材入りガラス粒を混ぜ合わせたタイルを大学内で焼成し、12月15日に同村で試験施工を行いました。1枚15cm×12cmの大きさのタイルを遊歩道に約15m敷き詰め、夕暮れ時に実験を行ったところ、ほのかに光る「ミニ銀河道」が浮かび上がりました。

岡本氏によると、家庭等で回収された空き瓶のうち、リサイクルされるのは透明と褐色の瓶のみで、それ以外の大半が再利用されずに有償で海中に埋め立てられているそうです。その廃ガラスに付加価値をつけ、新たな用途を見いだそうとするのがこの取り組みの目的です。11月11日には、学生たちと一緒に「蓄光ガラスを使った表札体験教室」を村役場内で開き、参加者に大変好評でした。同氏は「夜になると真っ暗になり、天の川がはっきり見えるのがこの村の魅力。ガラスおこしは、環境に優しいだけでなく、障がい者の就労支援にも役立ちます。いずれ住民たちの手で、自分の名前や思い思いの模様を描いて作ったタイルが遊歩道いっばいに敷き詰められ、新たな観光スポットになれば、こんなに素晴らしいことはない」と話しています。



焼き上がったタイルを確かめる環境工学研究部の学生たち



タイルを敷設する環境工学研究部の学生たち

巨大な吉野杉の前で